

伊豆分場だより

第 385 号

目 次

巻頭言

伊豆の海の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

調査研究から

キンメダイの胃内容物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

伊豆東岸（立て縄）のキンメダイ食害被害状況・・・・・・・・ 7

普及・地域の話

伊豆地域から指導漁業士1名が認定・・・・・・・・・・・・ 11

県漁業士会総会で名誉漁業士の称号と感謝状を授与・・・・・・・・ 12

西伊豆で「海底湧水」による沿岸環境改善の取組・・・・・・・・ 13

下田海中水族館でワカメ繁茂・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

トピックス

白浜に流れ着いたカジメ等のコンブ目褐藻・・・・・・・・・・・・ 17

人事異動と業務体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

漁 海 況

白浜の定地水温・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

令和8年1～3月の伊豆半島東岸定置網漁況・・・・・・・・・・・・ 24

分場日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場

令和8年4月

伊豆の海の変化

黒潮大蛇行は伊豆半島の漁業に大きな影響をもたらしました。2025年4月に終息したこの大蛇行は、過去に例を見ない約7年9か月もの長期にわたって続きました。伊豆半島では、海藻群落の衰退や磯根資源の減少が見られ、水産業全体に大きな影響をもたらしました。海と生活が深く結びついた伊豆の地域社会にとって、極めて重大な問題です。磯焼けによって特定の海藻が消失したり、これまで見たことのない種類の海藻が混じって生えるなどの現象は聞いていましたが、実際に現場で目にするると、その影響は想像以上に深刻であると感じました。現場を見なければ現状を正確に把握できないことを改めて認識しました。

黒潮は暖かく、栄養塩やプランクトンが少ないという特徴があります。そのため沿岸の水温が上昇し、海藻の成長に必要な栄養が不足して藻場が衰退し、磯根資源も減少することが知られています。黒潮大蛇行とは何か。気象庁の定義によると、潮岬で黒潮が離岸し、東海沖で黒潮流路の最南下点が北緯32度より南に位置する場合を指します。南に蛇行すると伊豆は関係ないと思われるかもしれませんが、南下した後に黒潮は伊豆半島沿岸に接近し、神奈川県や千葉県沖へと流れていきます。そのため、伊豆半島に直接黒潮がぶつかる形となり、大きな影響を与えました。

黒潮大蛇行の解消から約1年が経ちました。枯れた藻場や磯焼けとなった場所がすぐに回復し、磯根資源が急激に増えることはありません。しかし、はっきりと大蛇行終息の影響と断言できないものの、風や波の強い日の翌日には天草が沿岸に多く打ち上げられるなど、これまで見られなかった変化が確認され、少しずつ良い兆しが見られると感じています。

また、漁業以外では伊豆はダイビングスポットとしても有名です。私自身も趣味として時折潜りますが、例年冬に大瀬崎周辺で時折見られる深海生物が、今年は頻繁に確認されました。さらに、普段ほとんど目撃例のない西伊豆のダイビングポイントでも複数回観察され、大きな話題となりました。私の勝手な希望ですが、潮の流れが変化しているのが現れているのではと期待をしています。

漁業者の方々も黒潮大蛇行の終息に期待を寄せています。長期にわたる影響からの回復過程がどのように進むのか、今後もその変化を丁寧に記録していく必要があります。私自身も現場の声に耳を傾け、漁業者の方々と積極的に情報を得ながら、変化していく環境などを現場をみて、知恵を深めていきたいと考えています。

(伊藤 結花)

キンメダイの胃内容物

キンメダイは静岡県において重要な水産資源であり、伊豆地域では立て縄、底立て延縄という2つの漁法で漁業が行われています。

当分場ではキンメダイの資源回復を目的に種苗生産研究に取り組んでおり、調査で入手した産卵個体の体長や体重、内臓重量等の測定を行っています。今回は測定項目の1つである胃内容物や空胃率に焦点をあてた報告をいたします。キンメダイの主な餌生物は、オキアミ類、エビ類、イカ類、小魚（ハダカイワシ類等）で、成長に伴いエビ類から小魚に変化することが知られています。

これら餌生物の分布量が伊豆東岸沖や伊豆諸島周辺海域で育つキンメダイの成長や体の状態を左右すると考えられることから、黒潮の流れに着目し大蛇行終息期である2025年度、大蛇行中の2021、2022、2023年度、非大蛇行期である1991年度～1998年度までの3期間の胃内容物調査結果から、①空位率、②餌生物の出現頻度(%F)を算出し、キンメダイが採捕された漁場別あるいは水揚のあった港別に情報を整理しました。

①空胃率(%) = 胃内容物がなかった個体数 / 胃内容物を確認した個体数 × 100

②出現頻度(%F) = 各餌生物が見られた個体数 / 胃内容物が確認できた個体数 × 100

また、2025年度についてはその他の情報として肥満度でも比較を行いました。

③肥満度(CF) = 魚体重 / (尾叉長)³ × 1000

2025年度（黒潮大蛇行終息期）に得られた、南伊豆沖56個体、稲取沖23個体のキンメダイの胃内容物（釣餌除く）を以下のように整理しました。魚類（ハダカイワシ類とそれ以外）、甲殻類（エビ類、オキアミ・アミ類、それ以外の甲殻類）、頭足類（イカ類など）。

2025年度の空胃率は南伊豆沖で空胃率53.6%、稲取沖で34.8%でした（表1）。摂餌していた餌生物の出現頻度は図1の通り、南伊豆沖、稲取沖ともに甲殻類が60.2%、80.0%と最も多く、南伊豆沖では次いで頭足類19.2%、魚類3.8%。稲取沖では次いで魚類13.3%、頭足類6.7%確認されました。南伊豆沖、稲取沖で比較すると、稲取沖で魚類が多い傾向が見られました。

肥満度（図2）については、採捕した時期、大きさが異なるため肥満度の組成が違ふことが要因の1つと考えられますが、南伊豆沖では22-23%、稲取沖では20-21%の個体が最も多く南伊豆沖、稲取沖で比較すると南伊豆沖で肥満度が高い傾向が見られました。

表 1 2025 年度 空胃率

	個体数(尾)	胃内要物(尾)		空胃率(%)
		あり	空胃	
南伊豆沖	56	26	30	53.6
稲取沖	23	15	8	34.8
合計	79	41	38	48.1

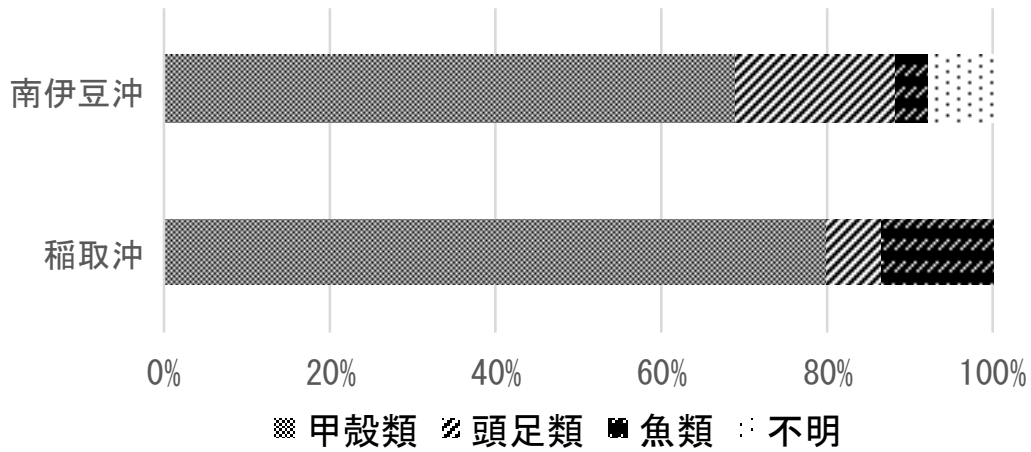


図 1 2025 年度 餌生物の出現頻度

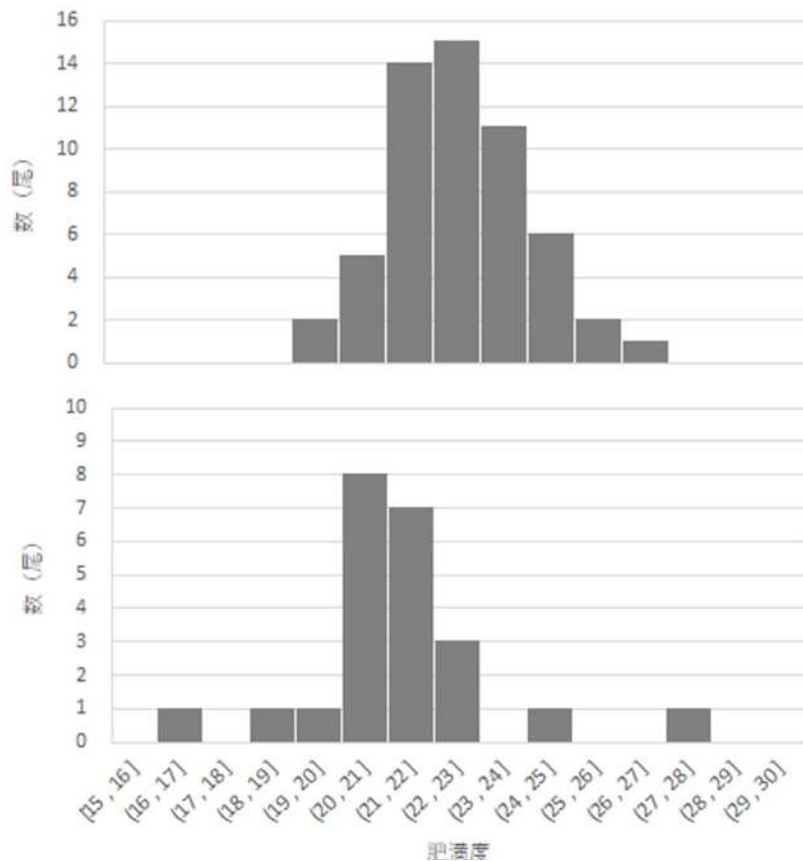


図 2 肥満度 (上：南伊豆沖 下：稲取沖)

次に2021、2022、2023年度（黒潮大蛇行期）を対象に南伊豆沖183個体、稲取沖171個体で2025年度と同様の集計をしたところ（表2）、空胃率は南伊豆沖49.7%、稲取沖78.4%という結果となりました。2025年度と令和2021～2023年度（合算値）を比較すると、2025年度の方が空胃率が低いことがわかりました。摂餌していた餌生物の出現頻度は図3の通りで、南伊豆沖、稲取沖ともに甲殻類が65.2%、54.1%と最も多く、次いで魚類が15.2%、16.2%、頭足類は5.4%、8.1%でした。

表2 2021～2023年度 空胃率（合算）

	個体数（尾）	胃内要物（尾）		空胃率（%）
		あり	空胃	
南伊豆沖	183	92	91	49.7
稲取沖	171	37	134	78.4
合計	354	129	225	63.6

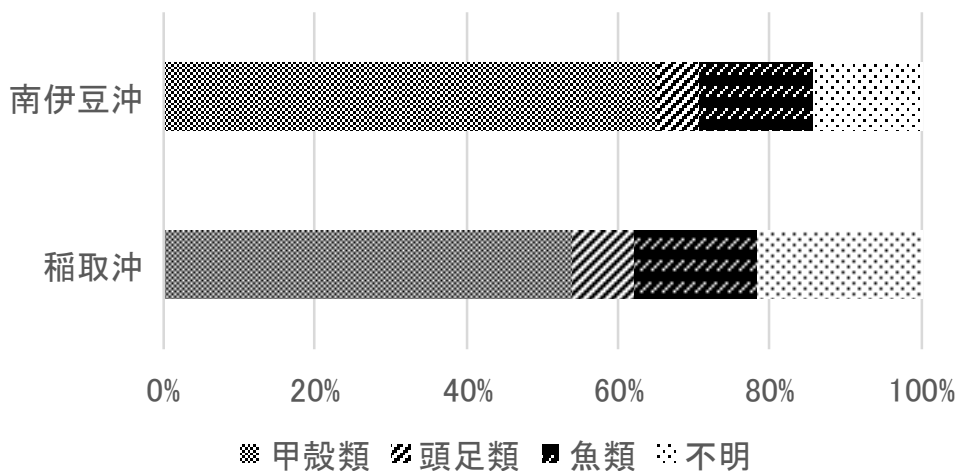


図3 2021～2023年度 餌生物の出現頻度

これらのデータは黒潮大蛇行期から終息期にかけて（2017年8月～2025年10月）のものであります。そこで、比較として黒潮大蛇行期ではない過去の測定データ（1991～1998年度まで）を使用し、当時の胃内容物についてまとめました。

詳細な漁場についてはわからないため、水揚場所として下田港（伊豆諸島周辺海域）、稲取港、御前崎港の3地区に分けています。サンプル数は689個体で、その内訳は下田港（伊豆諸島周辺海域）170個体、稲取港138個体、御前崎港381個体です。

空胃率は8.8～34.1%という結果となり（表3）、2025年度（黒潮大蛇行終

息期) や 2021、2022、2023 年度 (黒潮大蛇行期) の空胃率と比較すると低いことがわかります。餌生物については不明が多く (図 4 : 上)、不明であった個体を除くと (図 4 下)、いずれも甲殻類の比率が高く、次いで魚類、頭足類の順に出現しました。下田港 (伊豆諸島周辺海域)、稲取港、御前崎港ともに甲殻類が 63.3%、69.6%、71.3%と最も多く、次いで魚類 36.7%、30.4%、24.4%、頭足類は御前崎港のみが 4.4%確認されました。また、魚類は全ての水揚場所において 20%以上を占めており、近年と比べて高い傾向でした。

表 3 1991~1998 年度 空胃率 (合算)

	個体数 (尾)	胃内要物 (尾)		空胃率 (%)
		あり	空胃	
下田港 (伊豆諸島周辺海域)	170	155	15	8.8
稲取港	138	91	47	34.1
御前崎港	381	308	73	19.2
合計	689	554	135	19.6

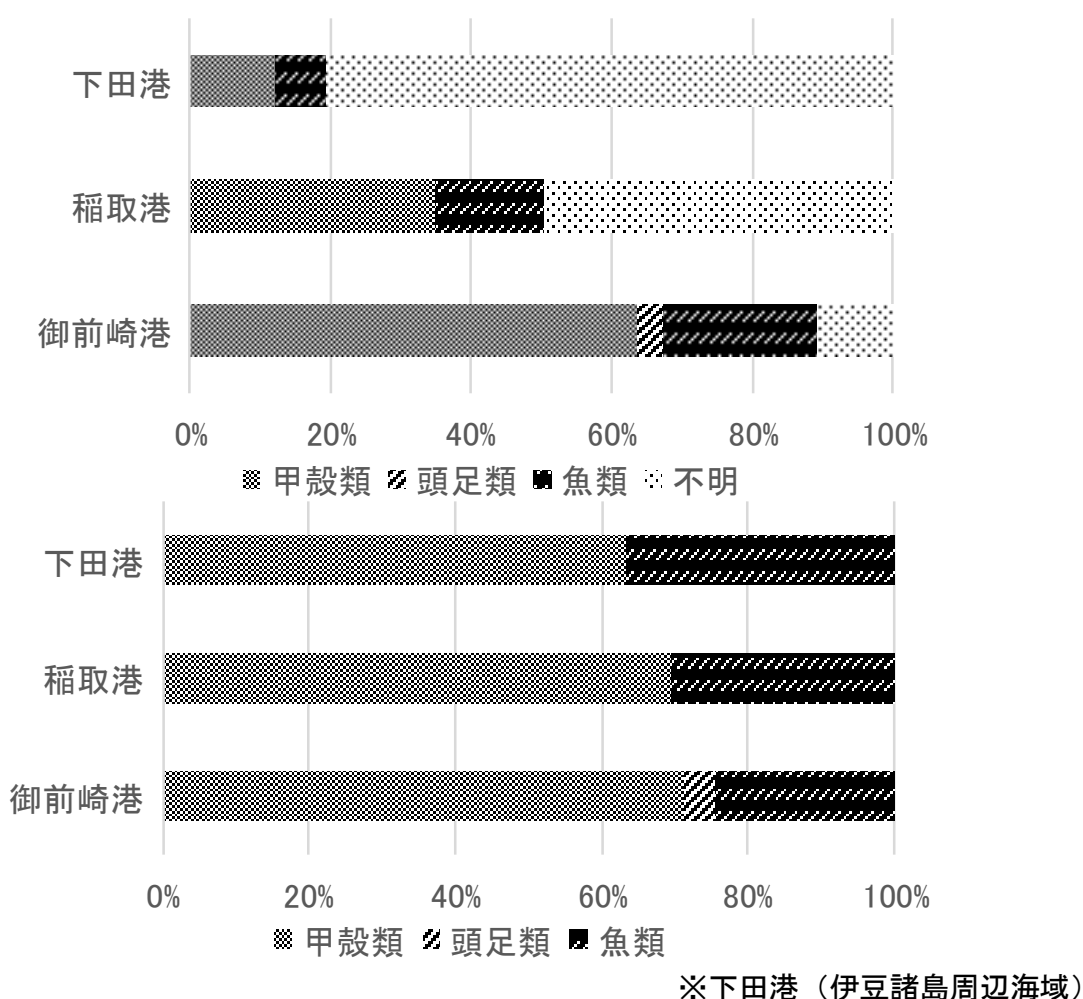


図 4 1991~1998 年度 餌生物の出現頻度 (下 : 不明除外)

以上より、非黒潮大蛇行期の1991～1998年度と近年（黒潮大蛇行から終息期）のキンメダイを比較すると近年は空胃率が高いことがわかりました。

静岡県と同一資源を漁獲している千葉県では2006年1月～2025年6月までの期間を対象としたキンメダイの食性に関する調査*をおこなっており、2006年～2016年の非黒潮大蛇行期と、2017年～2025年の黒潮大蛇行期で比較をしています。そこから得た空胃の状況は本県とは逆で黒潮大蛇行期は空胃率が低い傾向にありました。一方、伊豆東岸沖や伊豆諸島周辺海域のキンメダイは黒潮大蛇行期に入ると空胃個体が増加し、お腹が減っている個体が多い傾向があることがわかりました。

このことから、黒潮大蛇行の影響は地域によって異なり、特に、伊豆東岸沖や伊豆諸島周辺海域の漁場では、黒潮大蛇行が発生することでキンメダイにとっては厳しい餌環境になったと考えられます。様々な要因が考えられますが、大蛇行になると伊豆地域のキンメダイ漁場には黒潮から分岐した暖流がぶつかるように入ってきます。そのような潮流の変化に加え、黒潮の特徴である栄養塩の少ない海水の影響などにより、キンメダイの餌となる生物が減少した可能性が考えられます。

2025年4月に黒潮大蛇行終息し、約1年がたちました。黒潮大蛇行の終息により、今後、伊豆東岸沖や伊豆諸島周辺海域のキンメダイの胃内容物の餌生物の種類・量や空位率、肥満度がどのように変化するのか、注視したいと思います。

(伊藤結花)

参考文献

*尾崎真澄, 2026: 千葉県沿漁場で漁獲されたキンメダイの食性, 黒潮の資源海洋研究, 27, 97-100

伊豆東岸沖（立て縄）のキンメダイ食害被害状況

1 はじめに

漁業における食害とは、本来は漁獲できたはずの魚や道具が食害生物により失われることを言います。伊豆分場では、伊豆東岸沖漁場におけるキンメダイ立て縄漁の食害被害実態を標本船調査により把握しており、その結果について伊豆分場だより第350号（2018年7月）、第362号（2020年7月）で報告しています。

最後の報告から5年半経過していることもあり、2018年から2025年までの標本船調査による被害状況のとりまとめ結果と、新たな情報収集システムについてご紹介したいと思います。

2 調査方法と結果

(1) 標本船調査による被害状況の把握

標本船調査とは、漁業実態を把握するため特定の漁船に操業日報の記録を依頼する手法で、伊豆分場では伊豆東岸沖漁場を利用する立て縄船3隻を対象に実施しています。標本船は操業日ごとに、気象、海象、操業時間等の情報の他、キンメダイ漁獲尾数、食害生物による被害尾数、食害生物との遭遇の有無、食害による漁獲物の損失記録として釣針にかかった手応えと実際に釣上げた尾数の違いから推定した被害量を日報に記載しています。

日報に記載する項目のうち、食害生物については、これまでに被害を受けたことのあるサメ、イルカ、バラムツを対象に記録を依頼しています。

2018年以降の年別被害状況の把握のため、以下に記載した方法で被害率及び食害生物との被害遭遇率を集計しました。なお、今回の被害推定は漁獲物の被害を対象としており、漁具の被害等は考慮していません。

- ・被害率は食害が無ければ漁獲できた尾数のうち食害により失われた尾数の比率で、 $\text{被害率} = \text{被害尾数} / (\text{漁獲尾数} + \text{被害尾数})$ として求める。
- ・被害遭遇率は出漁した日数のうち食害被害を受けた日数の比率で $\text{被害遭遇率} = \text{被害を受けた日数} / \text{出漁日数}$ として食害生物別に求める。
- ・総被害量は伊豆東岸沖漁場での総水揚量を、被害率と市場への水揚量から、 $\text{総被害量} = \text{総水揚量} \times \text{被害率} / (1 - \text{被害率})$ で推定。
- ・総水揚量は伊豆東岸沖漁場での漁獲物が水揚げされる3か所の魚市場(伊東、稲取、下田)の水揚げ統計を使用。

図1に立て縄船3隻から推定した年間水揚量、被害量を積上げ棒グラフで、被害率を折れ線グラフで示しました。年間食害被害量は8~22トン(棒グラフ黒色部分)、被害率は3.2~10.3%で推移し、被害率が最大となったのは2025年でした。図2に示した食害生物別の被害遭遇率については、サメ、イルカ、バラムツの3種は2021年以降、横ばいあるいは10%程の増減を繰り返しているものの、被害遭遇率の合計値は、図1の被害率と同様に2025年が最大(49%)となりました。

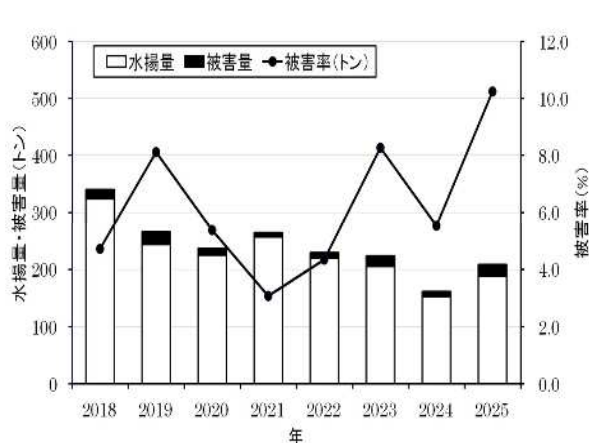


図1 伊豆東岸沖漁場(立て縄)における年間水揚、被害量、被害率

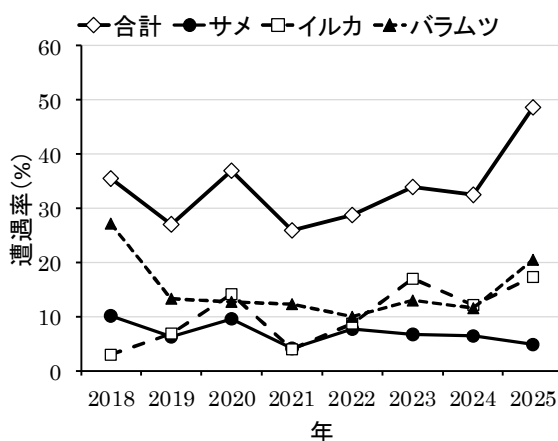


図2 伊豆東岸沖漁場における食害生物別の年間遭遇率

標本船の報告で被害率及び被害遭遇率が高かった2025年は先の黒潮大蛇行期の最終年にあたり、伊豆東岸沖のキンメダイ水揚量が少なかったことを考慮すれば、水揚量が多い年と比べて食害の被害が目立ったことを2つの図が表わしていると思います。

なお、食害被害が顕著な場合に起こりうる「多くの漁業者が漁に出たものの途中で帰らざるを得なかった(燃油代ばかり要してしまった)という状況」は、標本船3隻の集計だけでは可視化することが難しく、なるべく多くの漁船による簡易的な報告は得られないだろうかと思っていたところ、新たな情報収集手段として以下に記載するシステムが稼働し始めましたので、その概要と得られた情報についても記載します。

(2) キンメダイ食害情報収集システムを利用した情報共有

伊豆東岸沖漁場の立て縄船の被害情報については、2024年より新たに追加の情報収集を実施しています。スマホのLINE機能を使用したアプリケーション(以下、アプリ)から、食害生物に遭遇した海域、食害の原因生物、被害の有無、推定被害量などを報告・共有できます。

アプリはいとう漁協で先行して試験利用を開始し、2025年6月からは伊豆漁協を含めた両漁協の漁業者が利用しています。スマホに表示されるアプリ画面を図4及び図5に示しました。図4は報告画面で、ここに自分の漁獲に関する情報を入力できるようになっています。また、アプリでは自船の状況を報告するだけでなく、図5のようにアプリ利用者がどこでどのような食害種に被害を受けたかを一覧表若しくは地図で共有することができます。

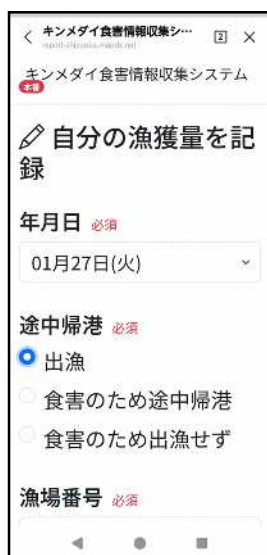


図4 アプリ入力画面



図5 被害状況共有画面

アプリ利用者が入力した細かな情報は、県（伊豆分場等）が閲覧、利用することが可能です。

操業日ごとに報告が必要な標本船とは異なり、任意の報告となる本アプリは現在のところ「伊豆東岸の利用者が食害に遭った場合」を中心にデータが送信されています。図4の回答例にあるように、アプリには「食害のため途中帰港」という選択肢があり、このデータから、アプリを利用する漁業者が入力した場合における被害率(被害量/水揚量+被害量)だけでなく、回答した漁船の総隻数から途中帰港を余儀なくされた隻数の割合を得ることができます。図6に食害発生時の月別被害率及び途中帰港割合を、図7に食害発生時の食害生物別遭遇率（重複あり。不明の場合の選択肢なし）を示しました。今回は集計対象期間をいとう及び伊豆漁協両方の漁業者がアプリを使用している時期に絞ったため、いずれも横軸は2025年6月から12月までの7か月間を示しています（月別回答者数の平均は26隻）。

図6では月別被害割合を棒グラフで示しており、グレーで塗りつぶした範囲が被害率に当たります。この間、月別の被害率は35~56%と概ね同程度の変化でし

たが、折れ線グラフで示した途中帰港割合は8月に最大の58%となって以降減少し、12月には最小となる9%となりました。アプリ経由で報告された食害生物のうち、8月と12月に最も回答が多かったのはイルカで、いずれも遭遇率80%近くとなっていますが（図7）、単独で出沒したのか、群れで出沒し集中的に食害に遭ったのか等、その時々状況によって帰港するか否かが分かれたのではないかと推測しています。

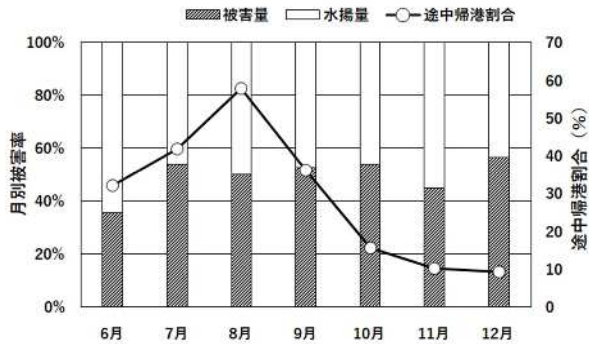


図6 食害発生時の月別被害率及び途中帰港割合

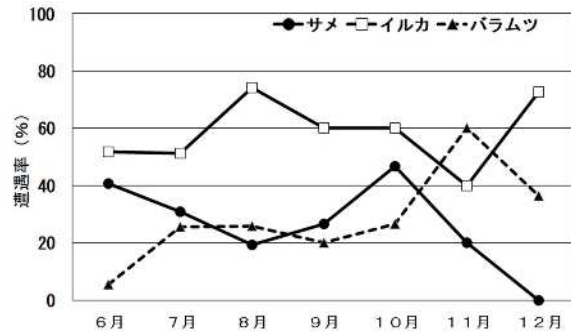


図7 食害発生時の食害生物別遭遇率（重複あり）

3 最後に

当アプリの活用は、標本船とは異なり入力には任意としている点に注意が必要ですが、これまで数値化できなかった「食害がひどくて操業を続けられなかった、あるいは出漁を取りやめた」という状況をその地域全体の傾向として捉えることができると感じています。

キンメダイの食害被害は静岡県だけでなく、関係する地域でも問題となっており、各地で対応策の検討や情報交換が行われているものの、決定的な手法は未だありません。こういった中、被害実態を数値化、可視化した上で状況を分析し対応策を練ることも重要です。そのためにも、標本船そしてアプリと複数の調査手法を活用しながら継続して情報を収集、公表していきたいと思えます。

(松浦玲子)

伊豆地域から指導漁業士1名が認定

漁業士とは地域の中核となる漁業者を県が認定する制度で、指導漁業士と青年漁業士があります。指導漁業士は先進的経営を行いながら、若手漁業者等の指導育成に積極的に参画している方や青年漁業士は漁業者グループ等に積極的に参画し今後も中心的な活動を見込まれる方が認定されます。

1月14日、県庁で指導漁業士、青年漁業士等の認定式が行われ、伊豆地域からは伊豆漁協稲取支所所属の富岡暁彦さんが指導漁業士として県知事から認定を受けました。富岡さんは一本釣漁業（キンメ、ムツ）や磯根漁業に従事されています。また、稲取支所青壮年部活動のほか、賀茂船主組合きんめ部会の役員として地域の活動に取り組まれています。

これからも地域の中核的な漁業者となる富岡さんのご活躍を期待するとともに、会場としても漁業士活動の支援を継続していきます。



指導漁業士に認定された富岡さん(後列左)

(松浦玲子)

県漁業士総会で名誉漁業士の称号と感謝状を授与

令和8年2月6日、第32回静岡県漁業士会通常総会が開催されました。当総会では開催地を西部、中部、沼津、東部地区の順で輪番制としており、令和8年度は東部地区の伊東市で開催されました。

総会では東部地区漁業士会の岩瀬清敏会長（稲取）が議長に選出され、滞りなく議事が進められたほか、各地区の活動紹介では山田龍哉青年漁業士（仁科）から令和7年9月に行われた県行政との意見交換会や西伊豆、稲取で行われている水産教室の内容等について報告をいただきました。

また、昨年漁業士会を定年で退会された高田充朗元指導漁業士（伊東）、新井俊文元指導漁業士（下田）のお二方については、名誉漁業士*の称号とこれまでの活動に関する感謝状が授与されました。高田名誉漁業士、新井名誉漁業士ともに漁業士会は退会されましたが、現在も漁業者として活躍されていることには変わりなく、これからも、東部地区、そして県の漁業士会活動を見守っていただきたいと思います。



写真1 演台で議長を務める岩瀬東部地区会長



写真2 前列左から、新井名誉漁業士、高田名誉漁業士、竹内副会長。後列左から原田副会長、大沼会長

※名誉漁業士とは、65歳の定年を迎えるまで10年以上、指導漁業士として活躍され、漁業士会の活動に大きく貢献された方に贈られる称号です。

(松浦玲子)

西伊豆で「海底湧水」による沿岸環境改善の取組

海底湧水とは、海底から湧き出る地下水のことで、豊富な栄養塩が特徴です。また、湧出量が増加すれば、海底の水循環が改善し、ヘドロ等の解消も期待できると言われています。

海藻群落が激減してしまった西伊豆町仁科では、伊豆漁協仁科支所による、海底湧水を人為的に増やして海藻に好適な環境を創出する取組を進めています。

同漁協は1月21日に仁科漁港内において、簡易な装置（塩ビ管とホースを繋げた水中ポンプ）を用いた海底の穴掘り作業（穴の直径3~5cm、深さ1~1.5m）を行いました（図1）。掘削した穴は十数個程度でしたが、慢性的に濁っていた船だまりの海水が作業翌日には透き通り、海底環境改善効果が早くも現れました。



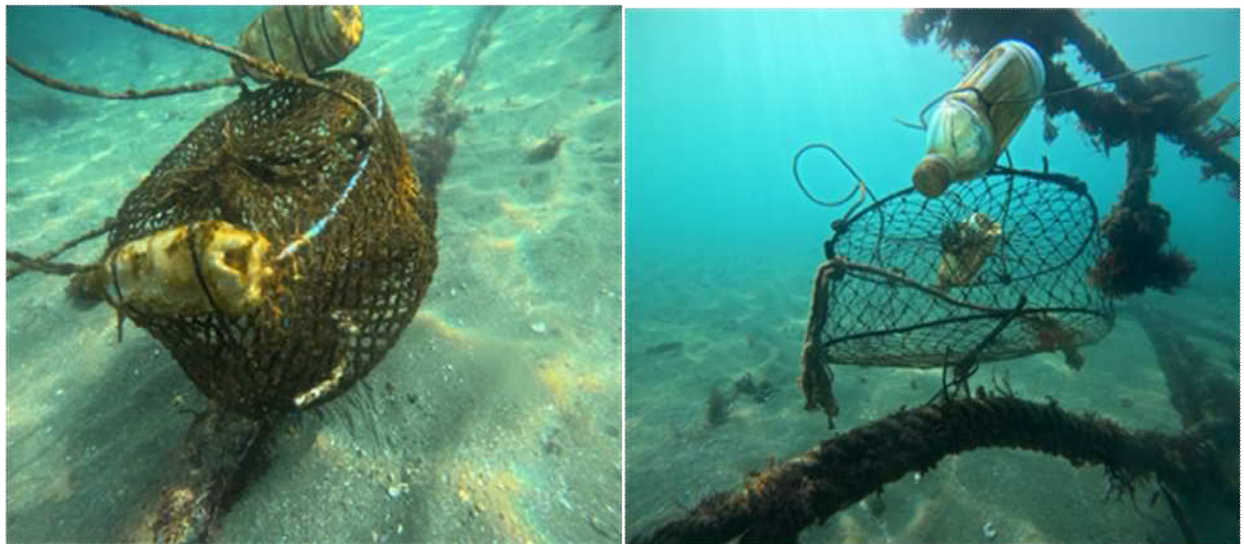
図1 海底掘削作業の様子

また、海底湧水が海藻の生長に及ぼす効果を検証するため、テングサの一種「マクサ」の幼体を海藻養殖用のカゴに入れて、掘削穴の近くの海底と、掘削穴から離れた場所の海底に設置しました。約1ヶ月後にそれぞれの状態を確認したところ、掘削穴の近くのカゴの方が、マクサの新たな側枝が多く確認でき（図2）、また、カゴに多くの珪藻が発生（図3）していました。今回の海底湧水の取組を指導、監督いただいた新井章吾氏（海藻研究所所長、一般社団法人 good sea 代表理事）によると、「海底湧水は栄養塩が豊富で、多くのミネラルやアミノ酸を含んでいる」とのことから、掘削作業により海底湧水の湧水量が増加し、それに伴って掘削エリア周辺の栄養塩も増加したことで、マクサ側枝増加や、珪藻の発生に繋がったと考えられました。

本取組により、簡易な装置で低コストに海底湧水の湧水量を増やせること、これにより水質の清浄化や栄養塩の供給が可能であることが明らかになりました。今後も取組を継続して、漁港外でも海底湧水掘削作業を実施して仁科地域沿岸の海底環境の改善を図ったり、海藻種苗移植やテングサのスポアバック設置等を同時に実施することで、海藻群落の回復に繋がることが期待されます。



図2 設置1ヶ月後のマクサ種苗の側枝（左側が掘削穴付近に設置したものの）



(鈴木勇己)

下田海中水族館でワカメ繁茂

平成29年9月から令和7年4月まで続いた黒潮大蛇行による高水温の影響で海藻が生育できなくなったり、海藻を食物とする魚に食べられたりし、伊豆半島沿岸に生育するカジメやワカメ等の大型海藻がほぼなくなってしまいました。

そのような中、下田海中水族館でワカメが繁茂しているとの情報を得、令和8年2月12日に確認させてもらったところ、「アクアドリームペリー号」という大水槽を配した入江に浮かぶ水族船及びそれにつながる栈橋の通路の側壁等に全長1m程度のワカメが生育していました（写真1、2）。一方で、水族館周辺の海岸を徒歩で見て回りましたが、ワカメを確認することはできませんでした。

下田海中水族館は天然の入り江を利用した施設で海とつながっており、外海とは網で仕切りがあるため海藻を食べる魚が侵入できない状況にありました。このことが魚に食べられることなくワカメが生き残った要因ではないかと考えています。

また、令和8年3月29日に下田市白浜の漁業者で構成される白浜漁業管理運営委員会が同水族館の協力を得て、館内に生育しているワカメを一部採取し、孢子葉^{※1}をスポアバッグ法^{※2}（写真3）により白浜漁港板戸地区に設置しました。

今後、水族館の周辺海域やスポアバッグ法を行った港内にワカメが生育することを期待します。



写真1



写真2



写真3

(山田博一)

※1：メカブと呼ばれるヒダ状の部分

※2：成熟した海藻を袋に入れて海域に設置することで、袋から遊走子等（陸上植物の種のようなもの）を周辺に拡散させる方法

白浜に流れ着いたカジメ等のコンブ目褐藻

平成29年9月から令和7年4月まで続いた黒潮大蛇行が終息しましたが、伊豆半島沿岸海域でコンブ目褐藻の生育情報については、本誌で紹介した水族館におけるワカメの生育情報以外ほとんどありません。今回、コンブ目褐藻の生育情報ではありませんが、令和8年3月に下田市白浜地先海域へ漂着したと考えられるコンブ目褐藻を採集し、その詳細を調査しましたので記録として残したいと思います。

【令和8年3月27日：下田市白浜 竜宮荘前】

地元漁業者から竜宮荘前の海に面した斜路にカジメのような海藻が打ち上がっているとの連絡があり、現場に行ったところ、そこにはアカモクに絡まったコンブ目褐藻が打ち上がっていました。それらを伊豆分場に持ち帰り、アカモクから外して得られた全5個体について写真撮影するとともに（写真1～5）、全長、茎長、茎径、湿重量を測定しました（表1）。海藻1（写真1）や海藻4（写真4）は少し葉部が残っており、その形態からカジメと推定されました。全長は14～80 cm、茎長は12～74 cm、茎径は8.8～19.5 mm、湿重量は25.0～428.5gの範囲でした。



写真1 海藻1（左）全体、（右）葉部



写真2 海藻2



写真3 海藻3



写真4 海藻4



写真5 海藻5

表1 竜宮荘前で見られたコンブ目褐藻

	全長 (cm)	茎長 (cm)	茎径 (mm)	湿重量 (g)	備考
海藻1	64	41	16.6	292.5	少し葉部あり
海藻2	80	74	18.9	428.5	ほぼ葉部なし
海藻3	75	70	19.5	250.0	ほぼ葉部なし
海藻4	37	29	15.3	87.5	少し葉部あり
海藻5	14	12	8.8	25.0	葉部なし

【令和8年3月29日：下田市白浜 白浜漁港板戸地区】

本誌15-16ページに示したワカメの増殖活動を漁業者とともに実施するため白浜漁港板戸地区に行ったところ、港内にアカモクが漂っており、海面から引き上げるとコンブ目褐藻が絡まっていました。それらを伊豆分場に持ち帰り、アカモクから外して得られた全3個体について写真撮影するとともに（写真6～8）、全長、茎長、茎径、湿重量を測定しました（表2）。海藻6（写真6）と海藻8（写真8）では茎葉移行部が二股に分かれていたため、アラメ（又はサガラメ）と推定されました。全長は43～180 cm、茎長は30～140 cm、茎径は14.8～28.6 mm、湿重量は63.0～1,124.0gの範囲でした。

海藻6については、茎長140 cm、茎径28.6 mmと非常に茎が長くて太い藻体でした。かつて伊豆半島にもアラメが生育していましたが、これらはカジメより浅い場所に生育し、干潮時には葉部が海面上に露出する個体も見られました。これらのアラメの茎は太かったという記憶がありますが、このように長い茎のアラメを見たことはありませんでした。



写真6 海藻6 (左) 全体、(右) 茎葉移行部



写真7 海藻7 (左) 全体、(右) 茎部



写真8 海藻8 (左) 全体、(右) 葉部

表2 白浜漁港板戸地区で見られたコンブ目褐藻

	全長 (cm)	茎長 (cm)	茎径 (mm)	湿重量 (g)	備考
海藻6	180	140	28.6	1,124.0	
海藻7	53	53	27.9	612.5	茎部一部欠損
海藻8	43	30	14.8	63.0	仮根部欠損

カジメやアラメは、以前は伊豆半島沿岸でも見られた海藻でしたが、冒頭で記載したとおり、現在のところ筆者の知る限りでは生育情報はほとんどありません。また、いずれもアカモクに絡まっていたことから、これらの海藻は以下に記したようにして流れ着いたのではないかと思われました。

アカモク等のホンダワラ類の褐藻は気泡と呼ばれる空気の入った玉を多数有しており、海中でも直立した状態を保つことができます。そのため、ホンダワラ類が流出すると海面を漂い、流れ藻となることが知られています。このことから、時化等によって流出したアカモクが周辺に生育していたカジメやアラメに絡まり、それらがともに流れ藻となって白浜沿岸へ到達した可能性が考えられました。

これらのカジメやアラメがどこから来たのか非常に関心があります。県内又は隣県において、このような立派なカジメやアラメが沿岸海域に生育しているという情報をお持ちの方は、是非ご一報いただければ幸いです。

(山田博一)

人事異動と業務体制

令和8年4月に、次のような人事異動があり、新しい業務分担が決まりましたので、お知らせします。

人事異動

退職	主 任	角田 充弘	
転出	分 場 長	鷺山 裕史	水産・海洋技術研究所浜名湖分場へ
転入	分 場 長	松 山 創	水産資源課から
採用	主 任	高木 康次	再任用

新職員の紹介

■松山 創（分場長）

この4月の定期異動におきまして県庁の水産資源課から赴任しました。伊豆分場での勤務は初めてとなります。

黒潮大蛇行は終息しましたが、いまだ水産資源の状況は悪く、水産業は大変厳しい状況にあります。伊豆地域の漁業振興のお役に立てるよう、各所と連携を密にして、分場一体となって出来ることから取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

■高木康次

水技研本所から4年ぶりに異動しました。最初に伊豆分場に赴任したのは31年前の平成7年で、今回で4回目になります。尾ヶ崎から見える白浜の景色は30年前と変わりませんが、この海で営まれているキンメダイ漁業、定置漁業、磯根漁業などの主要漁業をめぐる環境は大きく変わりました。これからも、伊豆の漁業はこのような環境変化に対応したより強い漁業に変化していく必要があります。気力は衰えていないつもりです。体力が続く限り、伊豆地域の漁業のために尽力したいと考えています。

令和8年度の業務体制

令和8年度の人事異動で転出した鷺山裕史に代わり松山創が分場長に、再任用職員として高木康次が着任しました。当初は戸惑いもあろうかと思いますが、これまで同様、地域に密着した普及・研究を行ってまいりますのでよろしくお願いいたします。

分 場 長 松 山 創

(総 務)

主 任 水 野 武 (賀茂農林事務所総務課兼務)

(研究科)	(普及班)
科 長 山田 博一	普及班長 松山 創
主 任 高木 康次	主 幹 松浦 玲子
研 究 員 伊藤 結花	主 査 鈴木 勇己
(会計年度任用職員)	
佐々木 昭 飯田 直樹 土田 大介	土屋留美

業務	主担当
1 伊豆分場業務の総括に関する事	松山・山田
2 予算・庶務に関する事	水野・山田
3 試験研究の企画調整に関する事	山田
4 磯根漁業の研究に関する事	山田・高木
5 キンメダイの種苗生産技術研究に関する事	伊藤
6 栽培漁業に関する事	高木・山田
7 漁業資源の資源管理、評価に関する事	松浦・鈴木・高木
8 マリンバイオテクノロジーやビッグデータ化に関する事	松山
9 普及事業の企画・進行に関する事	松山・松浦・鈴木
10 担い手の育成と確保に関する事	松浦・鈴木
11 地域水産業の振興に関する事	松浦・鈴木
12 海洋環境の把握、漁海況情報の発信に関する事	高木・松浦
13 水産技術情報の発信に関する事	山田・松浦・鈴木
14 船舶関係事務に関する事	水野
15 その他の事項	水野

漁 海 況

白浜の定置水温

令和8年1～3月の白浜の水温は、平年値と比べて1月は「やや低め」～「平年並み」、2月は「平年並み」～「やや高め」、3月は「やや低め」～「やや高め」で推移しました(表1)。黒潮は、1月から3月上旬までの間はC型基調、3月中旬はC型、3月下旬はB型で推移した。

表1 白浜定置水温の変化(令和8年1～3月)

月	旬	平均(°C)	平年差	前年差	最高	最低
1月	上旬	15.7	0.1	0.0	16.4	14.6
	中旬	14.5	-0.7	-1.1	14.8	14.9
	下旬	14.2	-0.7	-1.3	15.0	14.5
平均		14.8	-0.4	-0.8	16.4	13.7
2月	上旬	15.3	0.9	0.7	15.9	14.3
	中旬	14.7	0.4	0.2	15.7	14.1
	下旬	14.7	0.4	0.5	15.2	13.9
平均		14.9	0.6	0.5	15.9	13.9
3月	上旬	15.0	0.5	0.8	15.4	12.8
	中旬	14.8	0.1	-0.8	15.5	14.9
	下旬	14.8	-0.3	-0.7	15.2	14.0
平均		14.8	0.1	-0.1	15.5	14.1

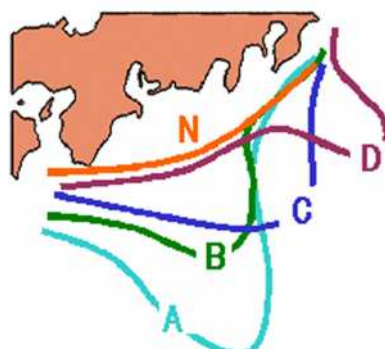


図1 黒潮流型

※水温の平年偏差の目安

かなり低め: $\sim -2.5^{\circ}\text{C}$ 、低め: $-2.4^{\circ}\text{C} \sim -1.5^{\circ}\text{C}$ 、やや低め: $-1.4 \sim -0.5^{\circ}\text{C}$

平年並み: $\pm 0.4^{\circ}\text{C}$ 、やや高め: $0.5 \sim 1.4^{\circ}\text{C}$ 、高め: $1.5 \sim 2.4^{\circ}\text{C}$ 、かなり高め: $2.5^{\circ}\text{C} \sim$

(松浦玲子)

令和8年1～3月の伊豆半島東岸定置網漁況

(1) 月別漁獲量

伊豆半島東岸大型定置7か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）における令和8年1～3月の月別漁獲量は表1のとおりでした。

表1 伊豆東岸定置網の月別漁獲量

月	漁獲量 (t)	前年比	平年比
1月	171	1.38	0.68
2月	190	2.22	0.74
3月	376	1.10	0.99
合計	737	1.57	0.80

(2) 魚種別漁獲量

多獲された魚種の月別漁獲量と主な漁場は表2のとおりで、マアジ、さば類、クサヤモロが多く漁獲されました。

マアジはいずれの月も漁獲量が多く、前年、平年を上回りました。さば類はゴマサバ主体でいずれの月も漁獲量が多く、特に3月は前年、平年を上回りました。クサヤモロは1、2月に漁獲量が多く、前年、平年を大きく上回りました。

表2 各月の上位5魚種の漁獲量と主な漁場

月	順位	魚種名	漁獲量 (t)	前年比	平年比	主な漁場
1月	1	マアジ	58.6	4.95	7.92	伊豆山
	2	クサヤモロ	36.0	32.24	608.58	谷津
	3	さば類	25.4	0.88	0.42	北川、伊豆山、川奈、谷津
	4	スルメイカ	11.0	0.83	0.22	北川、富戸
	5	メアジ	8.0	0.43	2.81	伊豆山、古網、富戸
2月	1	マアジ	73.5	4.65	1.51	古網、伊豆山
	2	クサヤモロ	31.0	-	59996.17	谷津、赤沢
	3	さば類	15.3	0.55	0.50	伊豆山、古網
	4	スルメイカ	14.3	3.32	0.60	北川、谷津、古網
	5	マルソウダ	13.4	0.96	14.43	伊豆山、古網、北川、富戸
3月	1	マアジ	162.6	12.83	1.75	伊豆山、川奈
	2	さば類	68.6	4.66	2.01	伊豆山、川奈
	3	マイワシ	28.8	0.19	0.36	古網、伊豆山
	4	ブリ	24.2	1.83	2.46	川奈、古網
	5	スルメイカ	23.5	2.73	1.00	北川、伊豆山、古網、川奈

(鈴木勇己)

分場日誌 (令和8年1月-3月)

1月13日	東部地区漁業士会役員会 (稲取)	2月16日	磯根資源・藻場研究会 (Web)
1月14日	漁業士認定式 (県庁)	2月19日	海業会議 (網代)
1月15-16日	関東東海ブロック普及指導員集団 研修 (銚子市)	2月19日	一都三県キンメダイ資源管理漁業者 実戦競技会 (横浜)
1月17日	賀茂船主組合総会 (キンメ漁業) (伊豆漁協)	2月20日	県水産物出荷組合連合会 定期総会 (静岡)
1月20日	海底湧水視察同行 (仁科)	2月25日	普及成果報告会 (本所)
1月23日	県キンメダイ資源管理漁業者実戦 競技会 (静岡市)	2月27日	技術連絡協議会 (本所)
1月13日	さけ・ます等栽培対象資源対策事 業現地検討会 (館山市)	3月3日	水産・海洋学講座 (下田)
1月29日	水産振興審議会 (Web)	3月5-6日	さけ・ます等栽培対象資源対策事 業成果報告会 (大阪市)
1月30日	磯焼け対策全国協議会 (東京都)	3月10日	アカモク養殖試験指導 (熱海)
2月3日	一般研究評価部会 (本所)	3月11-12日	海業推進本部会議視察研修 (小田原市)
2月3日	濾過器点検 (場内)	3月12日	水産海洋地域研究集会 (静岡市)
2月4日	エビ礁試験操業測定 (白浜)	3月16日	水産多面的事業報告会・藻場相談 (静岡市)
2月5日	取水ポンプ点検 (場内)	3月24日	テングサ作柄調査 (土肥)
2月6日	漁業士会総会 (伊東市)		

令和8年6月18日発行

発行 静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場
下田市白浜 251-1 (〒415-0012)
TEL <0558>22-0835 (代)
FAX <0558>22-9330
<https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/izu>
E-mail:suigi-izu@pref.shizuoka.lg.jp
編集 伊 豆 分 場